2015年2月8日 主日礼拝
説教「その一匹のために」
マタイの福音書18章12-14節

【その一匹を？】

「迷った一匹を捜しに出かけないでしょうか」(12)という主イエスのお言葉には、捜しに出かけることが当たり前という響きがあります。けれども、99 匹を残して、一匹を捜しに出かけることは、実は、当たり前のことではありません。仮に、この一匹が他の 99 匹を合わせたよりも、値打ちがあるのなら別です。でも、マタイの福音書には、いなくなった羊が、他の羊よりも値打ちのある羊だったとは書いていません。それどころかこの一匹は、実は問題のある一匹なのです。

【教会の仲間が】

今日の聖書の個所は、ここだけを切り離して読んではなりません。その前の教会憲章と呼ばれる 5－10 節の続きなのです。互いを受け入れ合うこと、互いをつまずかせないこと、最も小さな者を見下げないこと。そんな教会のあり方が、教えられ、そして一匹の羊の譬えが、語られているのです。

だから、この羊は、教会の仲間の一人のことです。私たちの仲間なのだけれども、迷い出てしまった者。つまずく、というのは、ワナにかかるという言葉です。ワナにかかった、罪のワナにかかった仲間。罪のワナにかかって、群の中から迷い出てしまった仲間。教会の仲間のひとりが迷い出たら、当然、捜しに出かけるはずだ、あなたがたもそう思うだろう、と主イエスはおっしゃったのでした。

罪のワナにかかったひとりの罪人のために、教会は平気でいることができません。迷い出た一匹を 1/100 と見なすことができないのです。まだ残っている 99 匹を守ることが大切だともっともな判断をくだすことができないのです。一匹を失うことの痛みに耐え切れずに、いわば 99 匹が一匹を捜し始める、それが、教会の姿なのです。

【主イエスとともに】

「このように、この小さい者たちのひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではありません」(14)とありますから羊の持ち主は、天の父。だから主イエスは、父とひとつのこころで、教会から迷い出た罪人を捜しに行かれるのです。けれども、イエスは、おひとりで、捜しに行かれるのではありません。私たちとともに、捜しに行かれます。私たちのうちに住んでおられる主イエスは、私たちを用いて、罪人をお捜しになります。教会が迷い出た罪人を捜すのです。罪のワナに捕らえられてしまい、自分たちから引き離された仲間を捜すのです。

捜すというのは、どういうことかでしょうか。罪にとらわれた兄弟姉妹は、実際は行方不明になっているわけではありません。目の前にいるのです。目の前にいる人を捜すというのが、どういうことかは、15－17 節にあります。まず、密かにいましめ、それでだめなら、仲間といましめ、それでもだめなら、教会全体でいましめるのです。これは、決して破門のための手続きを定めたものではありません。むしろ、罪を犯す仲間への断ちがたいあわれみを表現したものです。罪人を惜しむ主イエスのおこころそのものです。

教会は罪に対しては、断固として対決します。けれども罪人に対しては、どうにも、あきらめきれない思いをもって、もう一回、あと一回と捜しに行くのです。99 匹が痛んで、捜しに行くのです。何度でも何度でも。仲間をあきらめることができないのがキリストの教会。キリストのからだです。

なぜ教会はそのように生きるのでしょうか。それは自分もまた、迷い出た羊であることを知っているからです。自分が神さまと仲間たちに、愛され、捜され、赦され、受け入れられていることを知っているからです。

【私たちの使命】

牧会祈祷で一番たいせつなことは、会衆を代表して、罪の赦しを嘆願することです。それに先立つ礼拝を待つ時間は、私たちが迷い出た一匹の羊、罪のワナに捕らえられた罪人であることを思い出すときです。けれども同時に、私たちをあきらめないで、何度でも赦してくださる主イエスを覚えるときでもあります。だから私たちは、罪の赦しの宣言とともに、自分が仲間のたましいのために、心を配ることができるようにと、使命を新たにしていただくのです。